



# 九条の会

秋葉区「九条の会」事務局  
新津教育会館内  
新潟市秋葉区善道町2-9-44  
Tel 0250-21-3691 Fax 0250-21-3692  
<http://9jo.iinaa.net/>

## 戦争を人間の目でみる、心で考える

五十嵐 修（下越病院院長）

10月2日、品川正治さんの講演を再び聴くことができました。3月に秋葉区9条の会「結成3周年のつどい」で初めてお聴きしたのだが、今回は私たちの病院が加盟する民医連の学術運動交流集会でのことだった。当日はあいにくの雨。しかし会場の群馬県民会館ホール（前橋市）は全国から集まった千人ほどの参加者の熱気でいっぱいだった。

全体会のメインである記念講演で、例の如く、品川さんは慎重に壇上を進み、着席してお話を始める。聴衆はみな、医療や介護の現場で働く人である。演者の歩きを見て、転ばないかと心配する。ゆっくりとした話しぶりに、時間は大丈夫かと顔を見合わせる。だが、お話が進むとともにドンドン引き込まれていく。看護師や介護士さんたちの高齢者を看るときの職業的“本能”はどこかに飛び去り、品川さんがお話をする三好達治の講義終了の場面、軍隊で連隊長が「全員死ぬ兵隊だ」と言った話、いくつかの戦闘場面と生き残った者の罪悪感、そして復員船で憲法草案を泣きながら読み上げる場面、どれにも目頭に熱いものを感じながら聴き入る。私も2度目なのに、いっそう感動しながら聴いていた。

品川さんの訴えは、後半、特に30分ほどがすばらしい。平易な言葉でいて格調が高く、9条を守り、平和を守ることがいかに人間として大切なことか、胸にしっかりと刻まれる。しかも、それは「品川さんが特別に偉いから品川さんだけができる」という感じではなく、誰もが「やるべきだ」と思うし「やれる」と確信させてくれる口調である。

権力を握るものたちは「国家を守るには、戦争（軍事力）は必要だ」という。しかし、人間の目からみれば「殺し合い」であり、ミサイルを使えば「無実の子供が死に、母親が死ぬ」。だから、人間の心で考えれば「戦争はしないのではなく、できないのだ」。ホールの聴衆は息を呑み、低く静かに語る品川さんを見つめている。「日本国憲法はGHQが下書きしたとか、いや日本にもすでに研究があったとか、それはどうでもよい」。品川さんは「憲法9条は世界にとってかけがえのない宝」これを守ろうと訴える。どこかの企業の社長も、この会場の聴衆も、選挙では同じ1票なのだ。

戦争で大きなトラウマを蒙った品川さんは、ある講演会で戦友やその遺族が大勢集まっているのを知り、手をついて謝る。そうしたら、みんなが泣いて許してくれて…それから、すべての戦争体験を話すことができ、また、話すことが義務となった。「これからも語り続けるが、みなさんにも人間の目でみて、人間の心で考えて」平和を守ってほしいと呼びかける。聴衆の心に、素朴だが誇り高いエネルギーが吹き込まれていくのを感じる。

講演は、ぴったり1時間半で終わった。もちろん、経済人として、サブプライムローンからアメリカの軍隊と結びつく生命保険会社の話なども語られた。ホールに大きな拍手が起り、品川さんが大きな花束を受け取り降壇しても、千人の拍手はしばらく鳴りやまなかった。昼食後に宮城のお医者さんと話したが、「立ち上がって拍手をすべきだった」と彼は言い、私は「前に秋葉区でお呼びして、今回は2度目」、あらためて感動したことを話し、なぜか「2度目」であることが嬉しかった。平和憲法を誇りに感じ、強く守ろうと思った。

2009年10月

### 伝言板

「秋葉区九条の会」のホームページのアドレスが変わりました！

新しいアドレスは、<http://9jo.iinaa.net/> です。多くの方からのアクセスを待っています！

「平和のメッセージ」の原稿をお寄せください！

「戦中や戦後の生活の話」や「戦争と平和」など、平和への想いを事務局へお寄せください！

## 平和のメッセージ

秋葉区のすみずみまで響かそう、  
皆でつなぐ、平和のメッセージを！

### 「九条の会」を大きくしよう！

五十嵐政晴（車場1）

私は戦後民主主義教育を受けた世代であり、平和主義教育を受けたものです。その教育が下地となり、太平洋戦争は侵略戦争であり、大東亜共栄などというスローガンは、白人に代わって日本人が植民地の支配者になるだけのことではと考える。

また、NHKの教育TVやNHK特集のベトナムを見て、戦争とは国家の行う犯罪行為であり、犯罪行為であるからには、戦争の責任者は刑を受けてもしかたがないと考えるに至った。

アメリカのイラク戦争には、大義がないとマスコミは宣伝するが、私にすればどんな戦争も犯罪行為であり、悪である。その戦争を否定した9条を守るという会に参加でき、大変ありがたいと思っています。しかし、私より若い世代は、戦争や軍隊を必要と考える人達が多くなってきたようです。改憲派の巻き返しもあるでしょう。1人でも多くの方が憲法9条を守る会に入るようにしなければなりません。憲法9条を守りましょう。

### 平穏な暮らしを後世に 栗原久夫（新栄町）

父は昭和23年、49才でこの世を去った。間もなく母も逝くが、私が19才の時だった。

私の幼い頃の父は、ある会社に勤めた事もあった様であるが、その後は小さな事業に手を出したりして、いくつか異なった仕事に精をだしていたのを覚えている。そんな父が叔父に、将来息子には「世の中の動向にあまり左右されない仕事をさせたいものだ」と云っていたと聞いたのは大分後のことである。

昭和7年に日華事変が起こり、次第に戦争への色をこくしていく中、失業と生活苦との闘いなど、父がたどった苦労が叔父にそんな言葉を残していたのかもしれない。又、その裏には「戦争のために苦しめられた」といいたのかも知れない。そんな父が死にもの狂いで働き続け、生計を支え、肉体をすり減らしていた姿を重ねるには、私が世帯を持って生計も漸く落付いた頃である。戦争はいつの時代も弱い者を犠牲にすることには変りない。

幼い頃、離ればなれになって育った兄弟が再会し、昔を語り、涙した日々も遠のいているが、今でも、戦争さえなかったら親も違った生き方をしていただろうにと思ったり、勉学を志し上京し果たせなかつ

た弟のことなど思いをめぐらせている。

私には軍歴はないが、あと数ヶ月で80才を迎える。幸い現在は平穏な暮らしの中にいるが、平和は尊い犠牲の上で勝ちとられたものである事を忘れたくない。一部に憲法を変え、戦争のできる道を模索する動きのある中、今こそ正しい歴史認識のもと、平和を後世に伝える責務を強く感ずるこの頃である。

### 1945年8月15日 高井昭一（北上）

私にとっての「1945年8月15日」は、1944年11月の予科練での入隊がのび1945年4月に、それがまたのびて「1945年8月15日」が入隊の日であった。しかし、その頃は国鉄の列車も満足に動いていなかったから入隊など考えてもいなかった。

勤労奉仕が毎日の日課であり、その日も秋葉山で木を切り出す手伝いをしていた。貴重品だった杉の木を枝をもらい背中に背負い、玄関に入ると3畳の間、6畳と8畳の居間と台所のある下興野の二軒長屋に帰ってきた。

その日は父も母も祖父も祖母も弟達も1台の小さなラジオを囲んでなぜか固まっていた。玄関に入るとラジオからよく聞きとれないが「朕」という声を聞いたように思った。

ラジオに耳を付けて聞いていた父が、突然立ち上ると「神も仏もあったもんじゃねえ」と言って、頭の上の神棚をたたきこわしてしまった。だまって見つめている家族、誰も声を出さない。戦争が終わったのだ、一瞬そう思った。

国民尋常小学生だった俺が、少年航空にあこがれ国のためにと志願し、陸軍も海軍も合格した時、父はだまっていたが、母の目には涙が光っていたことは忘れられない。

ここから戦後の食料難が押しよせてくるとは思ってはいなかったが、家族12人の我が家は大変なものだ。母の単筒から1枚1枚となくなるのがわかる。夜になると風呂敷包みをかかえて母が出かけてゆく。

豆飯、大根飯は日常。買出しに行った母の帰りが遅い時は、腹を空かしている俺たちのために、一坪ほどの空地に植えた南瓜のつる、葉っぱを塩の汁にに入れて食べさせるそんな日もつづく。

終戦後の食料難は、誰もが経験したことだが、戦争の一面として今も忘れられない。

いつの日か「新しい日本の憲法が出来てや」という声が伝わってきた。「日本はもう戦争しないんてや」それを聞いた時、身体が軽くなったような気持ちになったことは今も忘れられない。

あれから我が家には神棚はない。祖父も祖母も父も母も今はもうけられないけれど、そんな我が家見守っているのかもしれない。